

『すべてあなたの思うまま』

ヴィスクから逃げて、グロウから逃げて、またヴィスクのところに戻ってきた私は、もしかしたら尻軽なのかもしれない。

私の体に刻まれたグロウの支配の痕跡は、日を追うごとに少しずつ薄くなっていた。あの日以来、私を抱いたヴィスクは、あらためて私と約束をした。

私の体の痣がすべてきれいに消えるまで、私に手は出さないと。

「もうしちゃったのに？」

今更じゃないのかな、と私が文句を言っていると、ヴィスクは困ったように笑って私に温かいお茶を入れてくれた。

あれから二週間、ヴィスクは本当に、ちっとも私に触れてこない。

キスくらいしてくれてもいいんじゃないかとねだっても、甘いお菓子を与えられて追い返されてしまう。

ヴィスクは本当は、私と恋人にかなりたくなかったんじゃないのかな？

二十五年も私に縛られて、執着してるような気がしてたけど、一度私と離れてみたら、ようやく解放されてせいせいしてたんじゃないのかな？

なのに私が帰ってきて、ヴィスクは優しいから突き放すこともできなくて、それで私に押されて一回やっちゃったし、ますます捨てにくくなっちゃったとかじゃないのかな？

ぐるぐる、ぐるぐる。

悪い考えばかりが次々と浮かんでくる。

グロウといるときは、こんな気持ちにならなかったのになあ。

私にはいつでもグロウの命令があつて、それに従ってない時間は少しもなかった。

こうして「好きに過ごしてください」と放置されると、支配されてる毎日がどれだけ楽だったかを思い知る。

ヴィスクの家は、あまり治安が良くない地域にある。

どうして？　って聞いたら、苦しむ子供の逃げ場所になれるようにって。

ヴィスクは本当に先生だ。

誰にでも優しい。

そして私は、そんなヴィスクの家から孤児院の部屋に戻されてしまった。

私はヴィスクの家でよかったけど、ヴィスクは「僕がいない間、危ないから」って。

つまり私は孤児院で寝泊まりして、ヴィスクは自宅に帰っていく。

「避けられてるみたい……」

夕方。

私は孤児院の中庭で、ホウキで枯草なんかを集めながら、ぼんやりと夕陽を見上げた。
「避けてませんよ」

そんな私の横にヴィスクが立つ。

私が見上げると、ヴィスクはいつもの、困ったような笑顔だ。

「でも……」

私はホウキを握ってうつむいた。

ヴィスクの笑顔が、あんまり真っすぐ見られない。

「二人きりになろうとしないよね」

「なってますよ。こうして」

「人目がある場所とか、外でとか、そういう場所ではなってくれるけど」

「それじゃ不満ですか？」

「私、ヴィスクを襲ったりしないのに」

「本当に？ よく思い出した方がいい」

「襲ったかも……」

からかうように言われて、私はますます小さくなる。

「やっぱり、嫌だったよね……」

「あの時、僕は嫌がってるように見えましたか？」

「み、見えなかったけど……後になって後悔するなんて、よくある話だし」

「君こそ、後悔してるんじゃないですか？」

「え？」

「僕をよく見て、オーリ」

私はじっとヴィスクを見た。

「……見たけど？」

「感想は？」

「ヴィスクだなんて」

「それじゃあ、窓に映る僕たちを見ましょうか」

ヴィスクに促されて、孤児院の窓を見た。

「何か言いたいことは？」

「あ、髪の毛くしゃくしゃ……」

私はいそいそと髪を整えた。

「ちよっと風が強くて……」

「わからないふりをしてるんですか？」

「まだ何かおかしい？」

「僕は三十九歳だ」

きよとんとしてしまう。

「それは……年が離れすぎてるから……私が後悔してるんじゃないのか？　ってこと？」

「そうですね」

「私がつと、若い男と付き合いたいんじゃないかって？」

「そう思う方が自然だ」

「じゃあ、ヴィスクは？」

「僕？」

「私が十七歳だから抱いたの？」

ヴィスクの表情がひきつった。

吐き気をこらえるような洪面を浮かべて、さっと私から目をそらす。

「ひどい質問ですね」

「ヴィスクも同じくらいひどいこと聞いたよ」

「それは……」

言い訳しようとして、ヴィスクは黙った。

二人並んで、私たちは夕陽を眺める。

「痣は、薄くなりましたか？」

「うん。もうほとんどない」

「手を握ってもいい？」

私は答えずに、ヴィスクの小指に小指を絡めた。

ヴィスクはそんな私の手をぐいと引っ張って、ズボンのポケットに引っ張り込む。びっくりして見上げると、ヴィスクはにっと笑って、

「僕はこれくらいしっかり握りたい」

なんて言って私は真っ赤にさせた。

「こ、孤児院の職員さんに見られちゃうよ……！」

「僕はかまわない」

「でも……」

「君が僕を選んでくれるなら、誰に見られてもいい。何を言われてもいい。君とこうして手をつなげることに、僕が望むことは何もない。ここで君にキスをしたっていい」

「そ、それは……！」

さすがにダメだよ、と言おうとした私の唇に、ヴィスクの唇がそっと触れた。

舌の絡まない、優しいキスだ。

それだけでどうしようもなく泣きそうになって、私はポケットのなかでヴィスクの手を強く握り返す。

「言っただけでしょう？　僕は重いって」

「い、言われた……」

「君はあの時混乱していた。あのまま僕につかまってしまったら、あまりにも不公平だ。だから、逃げる時間をあげたんです」

「そんなの要らなかった……!!」

「不安にさせましたか？」

「させた」

「どうお詫びをしたらいい？」

「そんなのヴィスクが考えて……!!」

泣きそうになりながら、ほとんどどなるように言った私の唇の端に、ヴィスクはまた触れ合うようなキスをする。

「このあと二人で、部屋を探しに行きましょうか。僕と君が、二人で住むための部屋」
「でも、ヴィスクの家は？」

「別の職員に格安で譲ろうかと。なんとなく、もう話についてるんですよ。僕もそれほど若くはないから、治安の悪い地域に住み続けるのはやめてくれと言われてるんです」
「そっか。たとえば十五年前なら、ヴィスクは二十四歳だったわけで、若々しくて背の高かったころのヴィスクは、治安の悪い地域でも平気で生活できたんだ。」

私から見れば、今のヴィスクも十分強そうに見えるけど……。

ん……？

待てよ？

「話がついてるっていうのは……つまりその……ヴィスクが一人暮らしする……って思ってる感じ？」

「いえ、結婚を視野に入れてる女性がいるのでという話を」

「……私のこと？」

「そうですね」

「もし私がヴィスクの言う通り逃げ出したら、どうする気だったの？」

「僕は重いと言ったでしょう？」

全然答えになってないけど、につこりとほほ笑むヴィスクの、晴れやかな笑顔が逆に怖い。

怖くて、ぞくぞくして、うれしくなる。

ヴィスクはこんなに私が好きなんだって実感できて、さっきまで不安でぐるぐるしてた心が穏やかになる。

わたしは試しに、ぎゅっとヴィスクに抱き着いてみた。

ヴィスクは躊躇なく抱き返してくれる。

温かい。

力強い。

私は幸せだった。

本当に、本当に幸せだった。

それなのに、どうして。

——どうして？

2

私は路地裏に立っていた。

背中は壁に押し付けられていて、目の前にはグロウがいる。
優しい笑顔だった。

だけど、どうしようもなく怖くて、私がガクガクと震えだす。

「あ、う……あ……」

叫びたいけど、声が出なかった。

私のそんな無様な姿に、グロウはますます笑みを深くする。

そして、そのまま私に口づけた。

唇に。

私の喉の奥まで、グロウの分厚い舌が押し込まれて、息が苦しくて私はもがく。
でも、少しも動くことができなかった。

瞼からボロボロ涙があふれて、垂れたよだれが服を汚す。

気を失う寸前に、ようやく呼吸を許されて、私はぜえぜえと喘いだ。

グロウは何も言わない。

何も言わずに、私の首筋に唇を這わせる。

そのまま、ガリリと強くかみついた。

「いつ……！ やだ、痛い……！！」

焼けるような痛みには、私は泣きながら必死にもがく。

首に、ぬるりとした感触があった。

むっとする錆のにおい。

わたしの血のにおい。

「どれくらいで消えるだろうな。この、噛み痕は」

耳元で、グロウが低く、甘く、優しくささやいた。

鼓膜をくすぐる吐息の熱さと、首筋の痺れる痛み。

「どうして……ッ……！！」

私は体をよじりながら、絞り出すように問いかけた。

「あなたは私のものと刻み付けるためだ」

「私、もう……グロウのものじゃない……！！」

「本当に、そう言えるか？」

足の間にグロウの膝が入り込んできて、私は「ああ」と声を上げる。

ぐちゅりと、ねばりつく水音がした。

喉の奥を震わせるような、グロウの低い含み笑いが、私を辱めていく。

「服を脱げ」

「嫌……!!」

「では破こう。そして全裸で路地裏を出ていくあなたを見送ろう。奇異の目にさらされ、哀れまれ、ヴィスクが慌てふためいて駆けつけてくるのを見ていてやる。あなたがそれを望むのなら」

「そんなの……!!」

「もう一度、選択の機会をやろう。選ぶのはあなただ。服を脱げ」

逆らえなくて、私はブラウスのボタンをはずした。

言う通りにしたのに、グロウはブラウスの下に着ていたものを、全部乱暴に引きちぎって、私の胸にまた噛みつく。

「痛い……!! やだ、痛い、痛い……!!」

大通りの人たちに聞こえないように、必死に声を殺して泣く私を無視して、グロウはつうと流れる血をすすり上げた。

スカートをたくし上げられ、下着もむしり取られる。

「なんで……やだ……返して……!!」

「あなたには必要ないだろう」

私があふれさせたものでぐしゃぐしゃに濡れた下着を私に見せつけて、グロウはそれを地面に捨てて踏みつけた。

そして、ひざまずく。

グロウが私のスカートの中に入ってきて、あふれて滴る愛液をすすり上げた。

「ひ、い……!! や……やめて、やめて、やめて……!!」

舌が、私の一番敏感なところを、ぐりぐりと責め立てて、太い指が何本も、私の奥まにかき混ぜて、頭がチカチカして、何も考えられなくなる。

ぐしゃぐしゃに泣きながら、私は薄暗い路地裏に差し込む大通りの光を見た。

時折、人が立ち止まってこちらを見るのは、私を見てるんだらうか？

それとも、路地裏の見えない闇に、なんとなく目を向けてるだけなんだろうか？

声を、おさえなくちゃ。

聞かれたら変に思われる。

変に思われたら見られてしまう。

「あっ……!! ああ、や……!!」

唇をかみしめた私の中を、グロウが一層激しくかき回した。

限界まで敏感になった快樂の中心に、グロウの唇が吸い付いて、グロウの口の中でめちゃくちゃになぶられる。

「あ、ひ……ああ……！ や、や、それ……あ、だめ……まっ……いい、っちゃ……も、いっちゃう……いく、いっ……ぐうう……！」

びくびくと腰が震えて、立っていられなくなった私の腰を、グロウは下から支えるようにして執拗になぶり続ける。

グロウは私の内ももに噛みついて、そのまま二つ、三つとキスマークを散らして立ち上がった——私を抱え上げながら。

背中に、壁の硬さを感じた。

私の両脚はグロウに抱え上げられて、お互いの腰はピタリと密着している。

グロウが少し力を抜けば、地面に足のついていない私の体はずり落ちて、なすすべもなくグロウに腹の奥まで貫かれる。

「い、いや……」

私はグロウの肩に手を当て、押し返し、体をよじって逃れようともがいた。

けどグロウの力は少しも緩まなくて、私は泣きながらグロウの肩を必死に叩く。

「おろして、お願い……！」

「おろしていいのか？ 本当に？」

少し、グロウが腕の力を抜いた。

たちまち私の体はずり落ちて、硬く張り詰めたものが、無防備に開かれた私に触れる。

けど、布の感触だった。

グロウはズボンをおろしてない。

くつくと、グロウが喉の奥で笑った。

「期待させてしまったかな？」

「期待なんて、してな……ひううつ……！」

ほっとした私の一番弱いところを、ざらりとした布の感触がこすり上げ、不意打ちで与えられた快楽に私は鳴いた。

二度、三度と腰をゆすり上げられ、私は耐えきれずにグロウの首にしがみつく。

どうにか快楽から逃げたくて、腰を逃がそうともがいても、壁に押さえつけられた私にはどうすることもできなかった。

「や、だ……！ 腰、とめて……やだ、それ……や、やあ……！」

「ああ、まったく……なんて声を出すんだ、あなたは。逃げ出した男に与えられる快楽に、少しもあらがうことができないなんて」

耳をなめるような、グロウの声が、私の鼓膜を吐息でくすぐる。

声を上げるのが嫌で、私はグロウの肩に噛みついた。

ふ、ふと浅く呼吸を繰り返して、無様に果てた私の体がビクビクと跳ねると、グロウは愛しげに私の耳に口づける。

「オーリ、どうか……そんなに物欲しそうな顔をしないでくれ。この先は、あなたが選んだヴィスクにねだるといい」

グロウが私の体を地面におろすと、私はへたへたとその場に座り込んだ。

このまま路地裏で犯されることを半ば覚悟していた私は、思いもよらなかった言葉にぽかんとして、間抜けにグロウに聞き返した。

「……逃がして、くれるの……？」

「もちろんだ。——だが、私があなたにつけたその傷を見て、ヴィスクはどう言うだろうな？ あなたをいたわり、ねぎらってくれるだろうか？ それとも、あなたの無警戒さを責めるだろうか？」

はつとして、私は首筋を押さえた。

それに、胸と、太ももの内側——血が出るほど強く噛まれた。体を見せたら、ヴィスクは絶対に何があったか察してしまう。

「あなたのことだ、きつとやつに知られまいと、傷を隠し続けるのだろうか。肌の見えない服を着て、『そろそろいいか』とあなたを摘み取ろうとするあの男を拒絶して。あの男は戸惑い、途方に暮れ、なぜ突然拒絶するのか説明してくれと、あなたに懇願するだろう。あなたはそれにどう答える？」

どうしよう。

どうしよう、どうしよう。

涙があふれて、ばたばたと地面に滴った。

とにかく体を隠したくて、ブラウスのボタンを留める。

けど、下着を奪われた私の体に、ブラウスがぴたりと張り付いて、血とグロウの唾液で濡れた体の線が隠しようもなく浮かび上がる。

「どうして……？ どうしてこんなことするの……！！ 逃げていいって言ったのに！

私が自由に選んでいいって、そう言ったのに……！！」

「そうだ。だが選択には結果がともなう」

「こんなの、違う……こんな結果……！！」

私が責めるように睨みつけると、グロウは物を知らない子供を見るような眼で私を見下ろした。

「では、どのような結果が待っているの？ あなたは私に蹂躪された体で、一度捨てたヴィスクの元に戻った。ヴィスクが本当に、無条件にあなたを受け入れたと思っているのか？ あなたに捨てられたことを、少しも気にしていないの？ 私に支配された日々で、あなたに刻みこまれた私の影に、あの神経質な男が気づかないとでも？」

「そ、れは……でも……ヴィスクは、私のこと……大事に……」

「そうだろうとも、そうするしかない。だから私はあなたを逃がしたんだ」

「な、に……？ どういう意味……？」

「あなたの存在が、あの男を苦しめる。私はそれに手を貸そう。あなたがそう決めたのだから。あの男のところに行き、少女のように泣くといい。嫌だと言ったのにグロウに無理やりされたのだと。——想像するだけでうずいてくるだろう？ あの男が自分の無

力を呪い、吐き気をこらえてひきつる顔を想像すると。あなたは自覚すべきだ。自身に残酷さに」

グロウの声は呪いみたいに、私の耳たぶを張って鼓膜に入り込み、脳みそにじわじわとしみこんでいく。

グロウは私に一番甘いキスを残して、路地裏から出て行った。

取り残された私は路地裏から動けなくて、夜がくるまでじっとそこでうずくまっていた。

私のブラウスは血まみれで、下着もなくて、明るいところで見たら絶対に何かあったと気づかれてしまう。

「部屋を探す……ヴィスクと……二人でいる……ずっと二人で……」

そうすれば、大丈夫だ。

ああ、でもヴィスクには仕事がある。私は日中一人きりだ。

そしたら、グロウが家に来るかもしれない。

そしてまた、私に所有の証を刻みに来るかも。

そのたびに、私はヴィスクを拒絶するのだろうか。所有の証が消えるまで。

ヴィスクはそれを許してくれる？

きっと許してくれる。そういう人だ。

私が「したくない」と言えば、ヴィスクは全然平気そうな顔をして我慢してくれる。でも、本当は平気なわけじゃない。

わかっている、本当は。

わかってた、ずっと前から。

グロウに調教された私を見て、ヴィスクがどれだけ傷ついたかわかった。

戻るべきじゃなかったんだ。

逃げるべきじゃなかった。

でも、だからってまたヴィスクのところから逃げ出すの？

そんなことできるはずがない。

「隠さなきゃ……全部……」

完全に暗くなるのを待って、私はそっと路地裏から出た。

胸の前で腕を組んで、スカートのすそを気にしながら、みじめな思いを抱きしめて孤児院の部屋を目指す。

誰にも会いませんようにと祈って部屋に駆け込んで、すぐに着替えを探した。

その時――。

「オーリ。帰ってきたんですか？　こんなに遅くまで、どこに――」

「入ってこないで！」

軽いノックと同時に、ヴィスクが部屋に入ってこようとする気配に、私は悲鳴みたいな声を上げた。

ざくりとしてヴィスクが動きを止めると、慌ててドアに駆け寄ってぴったりとドアを閉める。

「い、今、着替えて裸なの……！　いつも思ってたけど、ノックしても返事があるままで開けないで！」

「す、すみません……年頃の女性に、無作法でしたね」

ヴィスクの困ったような照れ笑いが、ドアの向こうから聞こえてくる。

温かくて、優しい声。

「ドア越しでいいので、少し、話をしてもいいですか？　本当に心配したんです。日が暮れる前に帰ってくる予定だったのに、もう子供たちは寝てる時間だ」

「ヴィスクも、家に帰ってる時間じゃない？」

「待ってたんですよ。君が心配だから。——オーリ、何かあったんですか？」

「何もないよ。大丈夫」

ヴィスクは深くため息をついた。

「……オーリ、僕は孤児院の院長だ」

「……だから？」

「隠し事をしている人間の態度はわかります。君はひどく怯え、傷ついている。どうか、抱きしめさせてください。そして僕に話を聞かせて。きっと力になりますから」

傷が、ずきずきと痛い。

言うべき言葉が次々に頭に浮かんでくるのに、脳みそにしみこんだグロウの呪文がその全部を封じてしまう。

言葉は涙になってすべてこぼれていってしまった。

私に残された言葉は、本当に少しだけだ。

「一人にさせて。お願い」

「オーリ……」

「お願いします……院長先生……」

ドアの向こうで、ヴィスクがはっと息をのんだ。

数歩下がる足音。

「……明日、また話しましょう。でも、今夜は孤児院に泊まります。君が寂しくなったり、やっぱり何か話したくなったとき、すぐに僕のところに来られるように」

声を殺して泣き崩れる私を置いて、ヴィスクの足音が去っていく。

「ごめんなさい……」

私はささやいた。

逃げ出してごめんなさい。

戻ってきてごめんなさい。

傷つけてごめんなさい。

拒絶してごめんなさい。

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい――。

あのまま床の上で眠っていたことに、目が覚めて気が付いた。
窓の外はまだ夜だ。

体が冷え切ってて、ぶるりと震える。

お湯で体を洗いたくて、私は部屋着に着替えて台所に向かった。

熱いお湯を桶に張って、その場で体のあちこちをぬぐう。

手拭いを見ると、乾いた血の塊で汚れていた。

そういえば、一度も鏡を見ていない。

私はグロウの噛みあとを撫でた。

「どうしよう……普通の服じゃ隠れない……」

かなりきつちりとした詰襟の服じゃないと……それか、ずっとスカーフを巻いてるとか。

ナイフで切ったと言いつて訳をして、ずっとガーゼをしておこうかな？

その方がいいかも……。

でも、ヴィスクが「ガーゼをかえてあげます」とか言い出したら？

「オーリ？」

「ひっ……!!」

「すみません。物音がしたので」

ランタンの明かりをかざして、ヴィスクが台所の入り口に立っていた。

ああ――起きてたんだ。

私が夜中に、ヴィスクに話しに行くかもしれないと思って、ずっと起きててくれたんだ。

――寝ててくれればよかったのに。

そんな風に思ってしまう自分が嫌で、胃がぐるぐるして、吐きそうになる。

「寝汗かいちゃって……体、ふいてたの」

「そう……手伝ってほしくはなさそうですね」

苦しそうな自嘲が、ランプに照らされて私を責めた。

早く出て行ってほしいと願いながら私が黙っていると、あろうことか、ヴィスクは台所に入ってくる。

過呼吸になりそうだった。

ヴィスクのことが好き。本当に大好き。

だから、今は近づいてほしくなかった。

叫び出したくなるほど、そばに来てほしくない。

だから私は、ヴィスクから逃げるように部屋の隅に走った。

明確な拒絶の意思を、だけどヴィスクは無視して私に近づいてきた。

「来ないで……」

ヴィスクはランタンをテーブルに置いた。

私が左右のどちらに逃げても捕まえられるように、長い両腕を開いて近づいてくる。

「来ないで、来ないで、来ないで……!」

泣きながら懇願する私を、ヴィスクはついに壁際に追い詰めた。

ヴィスクが壁に両手をつくると、私はヴィスクの腕の中に閉じ込められてしまう。

「ほら、捕まえた」

噛み痕を見られたくなくて、私は首に手を当て続けている。

ヴィスクはそんな私の手首をつかんだ。

「やめて……お願い……」

「怖がらないで。君は悪くない」

「どうしてそんなこと言えるの!?! 何も知らないくせに!」

「グロウが来たんでしょう? わかりますよ。やつがやりそうなことだ」

え、と私が気を抜いたとたん、私の首筋はヴィスクに晒されていた。

この薄暗い台所で、傷跡はどれくらいよく見えるんだろう。

「傷、すごく痛みますか?」

私は首を左右に振った。

グロウは加減を心得てる。

じりじり、だらだらと続く、さいなむような痛みの与え方を知っている。

「おいで。手当をしましょう。化膿したら大変だ」

「でも……」

「やつが傷つけたなら、僕が治す。ね? 僕がそうしたいんです」

ヴィスクに手を引かれて、私は薄暗い台所から、明かりのともった職員の仮眠室へと移動した。

ヴィスクは棚から救急箱をおろすと、ベッドで私と向かい合う。

「ああ……かわいそうに。噛み傷が腫れてる……消毒をしますね。染みますよ?」

「ん……」

びりりとする痛みに、私は体をすくませる。

首の傷だけ……首の傷だけだ。

大丈夫、胸と太ももの傷はバレてない。

ヴィスクが私の首に薬を塗って、ガーゼをあててくれるのを感じて、私はほっと息を吐く。

「ありがとう。ちょっと楽になった」

「——ほかには？」

「え？」

「オーリ。いい加減、僕を察しの悪い愚か者みたいに扱うのをやめてください。傷つきます」

「ご、ごめん……」

「それに、傷つけられた君を責めるようなクズ扱いすることも、傷ついた君を見て心を痛める弱い男扱いするのも禁止です」

「う、あ……うう……」

全部凶星で、何も反論ができなくなってしまった。

もごもご言うばかりの私の寝巻のボタンに、ヴィスクは淡々と手をかけた。前を開けると、胸にも噛み痕がある。

ヴィスクはこれも消毒して、ガーゼを当てて、寝巻の前をしめてくれた。

そして、じっと私を見る。

まるで私を試みたいに。

私はずりずりとベッドに乗りあがって、ヴィスクの前で脚を開いた。

ワンピースタイプの寝巻を太ももまでたくし上げると、グロウが残した痕がある。

強靱な精神力で、ヴィスクは少しも表情を変えなかった。

絶対に嫌なはずなのに。

腹が立ってるはずなのに。

「ごめんね、ヴィスク」

「謝らないでください」

「でも……」

「君は悪くない」

ヴィスクは私の内腿にもガーゼをはると、優しく微笑んで「はい、おしまい」と言った。

私は寝巻の裾をもとに戻して足を隠し、なんとなく居心地の悪さを感じてもぞもぞする。

「私……朝までここにいてもいい……？」

「いいですよ。大丈夫、僕が見張ってますから、怖い男はもう来ません」

「私、一人で出歩くの、やめるね」

「うん、しばらくはそれがいい。何か用事があるときは、孤児院の職員と一緒に出掛けるのがいいでしょう」

「早くヴィスクと二人で住みたいな」

「僕もその日が待ち遠しい」

「ヴィスク……」

「ん？」

抱いてほしい、と。喉まで出かけた言葉を、私は飲み込んだ。

また私は、ヴィスクを利用しようとしている。

グロウから逃げ出して、怖くて、震えていたあの夜――恐怖をごまかすために、私はヴィスクを利用した。

今もまた、グロウに食い散らかされた体の痛みをごまかすために、残飯のような自分をヴィスクに処理させようとしている。

「オーリ……キスしてもいい？」

「え？」

私が答える前に、ヴィスクは私の唇を奪った。

触れ合うだけのキスかと思ったら、舌が入り込んできて、私は夢中になってこたえる。嬉しくて涙があふれた。

グロウにめちやくちやにされた私にも、ヴィスクはこうして触れてくれる。背中に腕を回すと、そのままベッドに押し倒されて、足を押し開かれた。

「ごめん……ごめんねヴィスク、ごめん……ごめん……」

「しい……黙って。子供たちに聞こえたら大事です」

悪戯っぽく笑って、ヴィスクはまた唇で私の唇をふさぐ。

キスだけで簡単に濡れる私の卑しい体の奥に、ヴィスクが気遣うように入ってきて、私はヴィスクの腰に足を絡めた。

奥を突かれるたびに、ビクビクと腰が跳ねて、声が出そうになるのを必死にこらえる。ヴィスクの唇を噛みそうになって、私は顔を背けて自分の唇を噛んだ。

けど、ヴィスクはそれを許してくれない。

私が再びキスを受け入れるまで、何度も、何度も唇をついばんで、じらすように浅いところを行き来する。

耐えきれずに私が唇を開くと、すぐにまた舌が絡んだ。

そのままお腹の奥をえぐられて、私はヴィスクのスーツに爪を立ててもがいた。

安物のベッドが、私とヴィスクの代わりにうるさく軋んで、その音の大きさに怖くなる。

何度目かわからない絶頂が私の全身をひきつらせて、私と舌を絡めたまま、ヴィスクが苦しげに呻いた。

じわりとした温かさがお腹の中に広がって、私とヴィスクは抱き合ったまま乱れた呼吸を整える。

ヴィスクは私の肩に何度かキスしながら、クスクスと笑った。

「まったく……いい歳をして、こんな、子供が隠れてするみたい……」

「は、早くヴィスクと二人で住みたい……」

私はぐったりとなって、さつきと同じことを、心からの実感を込めて言った。声を潜めてするのがこんなにつらいなんて、知らなかった。

ヴィスクはそんな私の頬を指先でくすぐりながら、

「楽しんでるように見えましたよ？」

とからかうように言う。

私がヴィスクの顔を押し返してそっぽをむくと、また楽しそうな笑い声が静かに私の鼓膜を撫でた。

さつきまで私を絡めとっていた恐怖と罪悪感が、気が付けばもうない。

もしかしたら女は、こんな風に男の体に依存していくのかなと、不穏な考えが頭をよぎった。

これを言ったら、ヴィスクにまた叱られるんだろうけど……。

とにかく、私はまたヴィスクに救われてしまった。

「ヴィスクは私に甘すぎると思う……」

ぼつりとつぶやき、ヴィスクに背を向けて横たわると、後ろから抱き寄せられてどきりとした。

「ねえ、オーリ。君を失う以上に辛い事なんて、僕には何もないんです。だから、僕を傷つけまいとして、僕から逃げたり隠れたりしないでください。誰かにつけられた傷は全部見せて。僕を傷つけたくなったら傷つけて。利用したくなったら利用して。君のそばにいたための苦痛なら、僕はすべてが愛しいんだ」

「……もしまた、グロウが急にきて、私をめちゃくちゃにしても……？」

「そう。ほかのどんな男がやってきて、君をめちゃくちゃにして、君を汚い女だと思い込ませて。僕は君の味方です。絶対に君を責めない」

「でも、時々はお仕置きしてほしいかも……」

ぼろりとこぼれた本音に、私はちらと、肩越しにヴィスクを見た。

ヴィスクはとけるような笑みで、私の耳を軽く囁む。

「考えておきますよ、じゃあ。ほかの男にはできないようなお仕置きを」

う、うわぁ……どうしよう、ドキドキしてきた。

本当に、すごいお仕置きされそう……グロウとは別の方向ですごそう……。

腰に回ってきたヴィスクの手をぎゅっと握って、私は目を閉じて、自分の心臓の音を聞く。

首や、胸や、太もものにじりじりと停滞していた噛み痕の痛みは、いつの間にか感じなくなっていた。